



INAX MUSEUMS

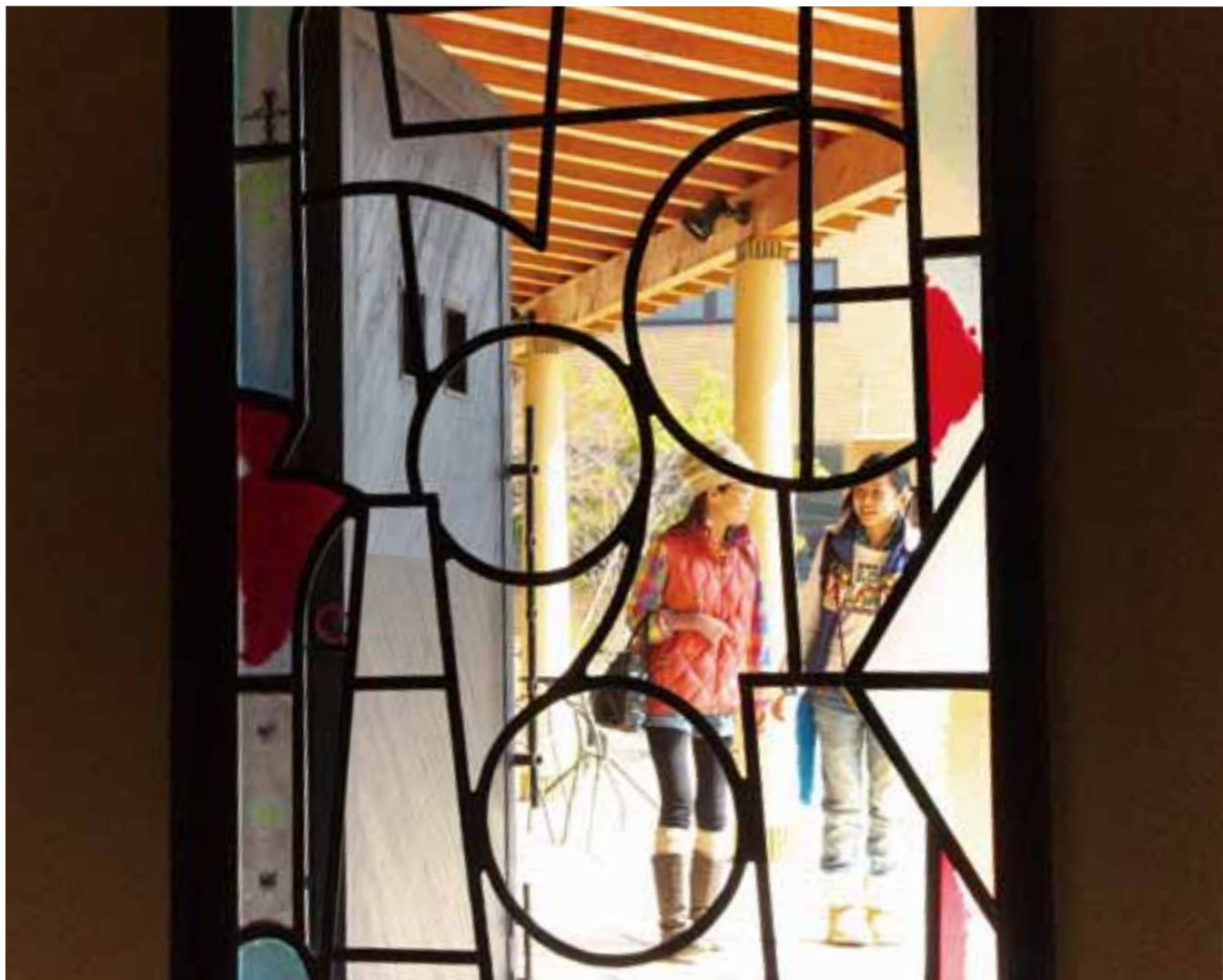
INAXライブミュージアム

NEWS LETTER

特集

やきものの街の記憶
常滑・瀬戸

vol. **19** | 季刊 2011 **春**



CONTENTS

INAXライブミュージアム
NEWS
LETTER

vol. 19 季刊 春
2011

表紙写真

静岡から母娘でドライブ。初めてのライブミュージアムは、陶楽工房でタイルやブチトイレの絵付けに挑戦、ものづくりを楽しみました。春もそこまで。休日をアクティブに過ごすお二人です。

(2011.2.27)

撮影：加藤弘一

[特集] やきものの街の記憶 常滑・瀬戸

- 02 土管 骨太な常滑の暮らしの象徴
- 04 焼酎瓶 重宝されたガラス瓶普及以前の器
- 05 窯垣 繊細なやきもの 瀬戸の道

LIVE SCHEDULE

- 06 これからの催し
企画展 やきものを積んだ街かどー再利用のデザイン
2011年 やきもの新感覚シリーズ
- 07 みんなでシャボン玉を飛ばそう
TOPICS 岡本太郎のタイル画『ダンス』修復完了
高島屋大阪店に設置・公開
フォトコンテスト2011 募集

LIVE REPORT

- 08 開催報告
企画展関連企画
「アーツ&クラフツのものづくりを体験しよう」
ルビー・ラスターのタイル制作
NEW YEAR CONCERT バロックリュート二重奏の饗宴
- 09 「自由時間」で、気軽にアートしませんか。

[特集]

やきもの の 街の記憶

おびたしい量の
やきものが焼かれた常滑・瀬戸。
街並みをかたちづくる
土管、焼酎瓶、窯道具などに
その時代の記憶が印されている。
それらはなぜそこにあるのか
どんな営みがあったのか。
当時を知る方のお話に耳を傾けると
かつての活気ある暮らしぶりが
生々しく甦ってくる。
語り継いでいきたい
貴重なやきものの歴史だ。

＊常滑造形集団が1970年の大阪万博に出展した、前衛的な陶製のベンチ。荒々しく朗らかな造形ととも、万博の目玉と言われたアメリカ館の「月の白」になぞらえたネーミングも「ニーク」で評判となった。



常滑から*

18

常滑西小学校 屋内運動場の陶壁画

ライブミュージアムを西へ、山方橋を北に折れると程なくその壁画は現れる。子どもたちの笑顔が道路に面した大画面から飛び出し出てくるような躍動感。周囲の風景のなかで異彩を放つ。近寄ると、立体のタイルで描かれた陶壁画とわかる。

昭和46年常滑西小の屋内運動場改築の折、近代的な施設に何か常滑らしいものをとつくったのがタイル4500個から成る巨大な陶壁画である。制作は若手陶芸作家らが結成した常滑造形集団。写真画像を、写真印刷の要領で「アミ点」という粒子に分解し、各々を立体タイルに置きかえる斬新な手法を用いた。どの角度からも同じ絵に見えるよう、色をつける面やその面積にも検討を重ねた。「今ならCGでやる作業を人海戦術でやった」。写真家の大崎保利さんは当時を振り返る。「万博に刺激されて、地方でも何か面白いことが起こる予感があった。一方で新しい時代を生きぬく術に不安もあった。『何か』を模索していた常滑の若き芸術家たちが情熱をぶつけたのが「月のイス」であり、この壁画でもあった。

尾之内明美（広報担当）

撮影：梶原敏英/加藤弘一/村山直章

土管どかん

骨太な常滑の 暮らしの象徴

古くから大型の甕や壺を焼いてきた常滑。明治に入り日本でも近代的なまちづくりが始まると、多数の「近代土管」が必要とされた。常滑の真焼まやきの甕のように高温で焼きしめた土管だ。

「土管をキーワードに常滑の街を歩いてみよう。驚くほどたくさん土管に出会うはずだ。崖の土留め、隣地との境界線、家の土台、屋根の棟瓦*…。それらがつくりだす景観は、やきもの街「常滑」の骨太な産業の歴史を物語る。

「子どもの頃、ここには草ぶきの家が建っていて、土台はそのままに上屋だけ建て直したはず。だから土台の土管は大正か明治のものじゃないかね」と案内してくれたのは、渡辺としこさん(90歳)。若いころ窯場で働いていた。「窯の出し入れ専門でやってた時もある。直径30cmの土管なら3本ずつくくって運んだわね。小さな身体でたいへんな力仕事をこなしていた。

渡辺さんも働いていた近所の「丸利陶管」は、明治20(1887)年から平成元年(1989)まで

*棟の最上部に載せる瓦



- 1 瀬木海岸から北条の港を望む(大正期)／大正2年に常滑まで電車が敷かれ、以後は貨車運搬に移行していく。
- 2 渡辺としこさんと森下常弘さん
- 3 窯入れ準備(昭和30年代)／造り納屋から陸橋で乾燥室まで土管を運ぶ。
- 4 窯焚き(昭和30年代)／火色を確かめながら、10ある焚口に次々に石炭を投入していく。
- 5 出荷準備(昭和30年代)

写真1345出典
「常滑郷土文化会つちのこ」



- 6 坂道が多い常滑では、戦中・戦後、土管を使って土を盛り、庭をつくって畑にすることが盛んに行われた。
- 7 土留め
- 8 土管のほかに、土管を焼成するときの道具である「ケサワ」や「パン」の廃材も使われている。
- 9 家の土台に使われた土管

冷ましている間は素地づくりだ。乾燥期間を入れると、常に3窯分の素地を準備しておかなければならない。その数1500本以上。一週間冷ましたら取り出す、まだ窯の中は髪の毛が焦げるほど熱い。「働きづめだったな。でもつくるだけ売れたから」と、森下さんは笑う。

土管はほとんどが公共事業に使われる。だから規格が決まっています。検査は厳しかった。一等品、二等品、三等品、等外品に分けられ、割れたり欠けたりした等外品は売れない。「等外品は全体の約

操業。最後まで土管をつくっていた。昭和28(1953)年に家業を継いだ三代目の森下常弘さん(78歳)は「土管は終戦後からオイルショック(1973年)までが最盛期。常滑だけで600軒は窯があったんじゃないかな」と語る。

丸利陶管には常滑オリジナルの「両面焚倒焰式角窯」が1基。成形・乾燥した土管を窯の中に奥から順に並べていく。1列並べたら上に棚板を置き、その上にまた積む。3〜4段、天井いっぱいになるまで入れて、1窯で500本以上の土管が焼けた。窯は10日一回転。窯入れが終わると、火入れ。12時間交代で3昼夜、5分おきに10力所ある焚口に石炭を投入して回った。焼きが終わり、



3%ほどだった」と森下さん。単純計算で5000本焼いて15本の等外品。生産技術が未熟な時代はもっと多かっただろうが、街で出会う1本の土管の背後には、30本以上の製品として売れた土管が存在することになる。

売れない等外品を利用して、常滑の人々は身近な空間を整備してきた。「仕事の合間に自分たちで積んだよ。だから場所によって積み方が違う」と、森下さん。明治、大正、昭和と、土管を焼き続け日本全国に送り出してきた常滑。街角の土管一つひとつが、その時代の記憶をとどめている。

焼酎瓶

重宝された
ガラス瓶普及
以前の器

ガラス瓶が普及する前、焼酎や酢・みりんなどを入れる器として古くから常滑で焼かれたのが「焼酎瓶」だ。慶応年間創業の山文製陶所では、初代から焼酎瓶を手掛けてきた。「繁盛期は終戦後から昭和30（1955）年頃だったかな」と話してくれたのは、五代目の山本尊明さん（86歳）。「1基じゃとても間に合わんというところで、両面焚倒焰式角窯をもう1基つくって、2つでやっていった。焼酎瓶が1基に2000本入る大きな窯だったよ」。

一つの窯は13日のサイクル、それが2窯。「2昼夜焚いて、その間に素地をつくる。一日のノルマは一人90個。それだけつからないと窯の回転に間に合わないんだ。忙しかったし眠かった。あんな仕事はもうできんなあ」と、感慨深げ。焼酎瓶にはキメが細かく焼き締まりのいい粘土が使われる。一度乾燥させた素地を焼かずに置いておくことと空気中の水分を吸って割れてくるので、つくり置きができない。だから、1窯13日のサイクルに合わせて、必要な2000個をつくらなければなら



1

窯垣

織細なやきもの
瀬戸の道

瀬戸の街で見かけるのは、登窯を焼くとき商品を守るために使う「窯道具」だ。釉薬をかけた商品を入れる「エンゴロ」、棚積みを使う「棚板」、それを支える「ツク」など。もう使えなくなったこれらの廃材が、垣根、土留め、建物の土台などに使われ、それぞれ個性的な幾何学模様で街を彩っている。

瀬戸の人たちにとって、あまりに当たり前の廃材のある風景。それを評価したのは、民藝運動の柳宗悦、バーナード・リーチらと親交の深かった瀬戸本業窯の六代目水野半次郎氏だった。「外から見たら、街じゅうが文化財のようなものだ」と言いかつたんでしようが、当時は理解されなかつたようです」と、七代目の水野半次郎さん。水野さんは延長約400mの「窯垣の小径」を整備するなど、多くの窯場があった洞町の景観保存に尽力している。「窯垣の小径」は、かつて陶磁器を運ぶ荷車や天秤棒を担いだ担ぎ手さんたちが行き交った道だ。



「瀬戸の人はみんな、何らかの形でやきものに関わっていました。あれだけの廃材が出る産業の



2



3

なかったのだ。

焼き上がった焼酎瓶は原っぱに出して検査。「焼酎瓶は上等かペケ品。ペケ品は3〜5%で、上等はすぐに出荷。今でも九州から伊豆方面まで焼酎屋に行くとき、うちの判のある焼酎瓶を見かける。判なんか見ないでも一目でうちの瓶はわかるがね」。では、ペケ品はどうなったのか。「欲しい人が多くて、出るたびに近所に持っていった。土留めに使うんだ。焼酎瓶は軽いから、自分たちで簡単に積めるからね。わしの生まれるずっと前からそうだった」。人気のリサイクル材だったのだ。常滑の観光名所「土管坂」の焼酎瓶の土留めは山本さんが数地の人に頼まれて積んだとか。「へ文」の家号を探してみても。



2

集積、組織があったということです。ある意味で産業遺産と言えるかもしれません。何度も窯の中で焼かれた自然灰の結晶です。すごく味が出てきたときに廃材となる、究極のやきものと言えるでしょう」。

水野さんが子どもの頃、窯には「野郎さん」と呼ばれる下働きの人たちがいた。祖父が指示したように、彼らが窯垣を積んでいた様子を覚えているという。「言われたままに規則正しく積まれた壁。それが時代を経ても飽きられず、生活に溶け込んでいる理由だと思います」と、水野さんは言う。

- 1 山本尊明さん
- 2 土留め/口を外に並べていく形が多い。「その方が強いから」と、山本さん。口にネジがきつてあるのは、戦時中につくられた「硫酸瓶」。
- 3 焼酎瓶/底径30cm、小さな口が付いた総高44cmほどの円柱形。1斗(18リットル)入りが標準サイズ。下部に「呑口」の孔が開いているが、時代とともに次第になくなっていく。呑口の反対側上部についている取っ手は、残った焼酎を傾けて出し切るためのもの。
- 4 焼酎瓶が土台に使われている家
- 5 土管坂



4



5



6



3



4



5



6



7

- 1 七代目水野半次郎さん
- 2 窯垣の小径
- 3 共同で焼く登窯で使う窯道具には、それぞれの家号が印されている。
- 4 5 6 個性的な積み方。
- 7 窯道具が並ぶ瀬戸本業窯の登窯
- 8 鬼板(釉薬などに使う酸化鉄)の窯垣
- 9 建物の土台



9